

4 記憶障害を呈した若年脳損傷者への社会参加支援

～復学を目標としたリハビリテーションから

国立障害者リハビリテーションセンター病院第一診療部 1) リハビリテーション部 2)

浦上裕子 1) 山本正浩 2) 菅野博也 2) 岩淵典仁 2) 長門亜由美 2)

【背景と目的】 当院で過去7年間に復学を目標として、急性期～慢性期に外来または入院で包括的リハビリテーション（以下リハ）を行った60名（男38女22：受傷時：小学生2名，中学生5名，高校生18名，大学生・専門学校生35名）のリハ終了時の帰結は、復学48名，転院5名，在宅7名と高い復学率だったが、追跡調査時点（平均1011.4±811.5日経過）では、通学中31名（問題あり6名），転校（サポート校など）3名，卒業後就労8名（問題あり5名），未就労3名，中退10名（就労2名，未就労8名），在宅生活2名，職業リハ2名，その他1名となった。復学しても、追跡調査時点では、適応できず障害枠での就労や訓練を希望するようになり、17名（28.3%）が手帳を取得した（第32回業績発表会）。この結果からわれわれは、疾患別、記憶障害の長期的な経過・予後を見通して、生活支援・社会支援を検討することが重要と考えている。その視点で、今年度復学を目標にリハを行った若年脳損傷者を分析する。

【対象】 対象は今年度、復学を目標として、急性期～慢性期に外来または入院で多専門職種によるリハを行った16名（11～23歳：男12女4；外傷性脳損傷8名，低酸素脳症3名，脳炎2名，ミトコンドリア脳症1名，脳腫瘍2名）である。

【結果】 ①当院で回復期の入院リハ対応を行った者は7名、その後の帰結は、外傷性脳損傷（外来通院リハ3名、転院1名）低酸素脳症（在宅1名）、脳炎（外来通院リハ1名）、脳腫瘍（外来通院リハ1名）であった。記憶障害に改善が認められた者は、外傷性脳損傷3名、脳炎1名であった。②他院での回復期リハ後の慢性期に当院で入院と外来でリハ対応を行った者は9名、その後の帰結は、外傷性脳損傷（復学2名，就労1名，在宅生活1名）、低酸素脳症（復学1名、進学1名）、脳炎（生活訓練2名）、脳腫瘍（職リハ1名）であり、記憶障害に改善が認められた者は、外傷性脳損傷1名、低酸素脳症1名、脳炎1名であった。

【考察】 記憶障害（前向健忘）は、側頭葉内側部（海馬）、間脳（視床）、前脳基底部、Papez回路の構造物、び慢性軸索損傷、白質病変などによっても生じ得る。原因疾患によって記憶障害の内容が異なり、長期経過や生活障害の様相、地域での対応の在り方にも違いがあるが、回復期、慢性期、いずれの時期においても回復は起こりうる。そのため、復学だけを目標とした支援を行うのではなく、記憶障害による生活障害全般に介入し、本人が自らの記憶の能力に対する認識（メタ記憶）を高められるようなかかわりの継続が必要である。